

第 365 回 大阪大学臨床栄養研究会(CNC)

日時：平成 28 年 3 月 28 日（月）18：00～

場所：大阪大学医学部 講義棟 2 階 B 講堂（吹田市山田丘 2-2）

～嚥下出来ない患者様のお薬はどうするの？～

「安全・有用な簡易懸濁法の活用」

岸和田徳洲会病院 薬剤部
藤原 琴先生

超高齢社会に入り、我が国では摂食・嚥下障害のため経管投与を受けている患者数が急増している。胃瘻や経鼻経管栄養が普及し、多くの施設および在宅療養の場で経管投与が実施されるようになった。この場合栄養だけでなく内服薬もチューブから投与されている。従来は、散剤や錠剤を粉砕し水や湯に溶かしてチューブから入れる方法が行われてきたが、2001 年に倉田なおみ先生らにより「内服薬経管投与ハンドブック」が発行され、薬剤をそのまま温湯に崩壊・懸濁して投与する「簡易懸濁法」が知られるようになり、現在は広く普及している。2013 年の日本病院薬剤師会学術委員会が行った「経管投与患者への安全で適正な薬物療法に関する調査・研究」では、全国526病院の78%の施設で簡易懸濁法が導入されていることが分かった。

簡易懸濁法は錠剤粉砕やカプセル開封せずに、錠剤・カプセルをそのまま、あるいはコーティングに亀裂を入れて、温湯（約55℃）に入れ、崩壊・懸濁させて経管投与する方法である。簡易懸濁法は粉砕法の問題点である薬効成分の低下、粉砕・分包による投与量の減少、接触、吸入による健康被害などが回避され調剤時間も短縮される。

2006 年改訂の調剤指針には、簡易懸濁法がすでにひとつの調剤方法として掲載されており、今後もさらに広く普及・導入されていくであろう。そこで、安全・有用な投薬を目指して正しく理解、普及されることを願うと共に、当院での導入の経緯や実際の運用、簡易懸濁法に適した代替薬の選び方などが少しでも参考になればと考える。

世話人：大阪大学大学院医学系研究科 病院薬剤学講座
大阪大学医学部附属病院 薬剤部 大石雅子
E-mail：oishi@hp-drug.med.osaka-u.ac.jp

次回 366 回 CNC は、猪阪善隆先生のお世話で平成 28 年 4 月 11 日（月）開催予定です。